

第四章 悪意の胎動

……ルクエラ城より南東に三〇リーグほど離れた深い森の中に、うっそうと生い茂る木々に囲まれて、僧院がひとつ、ひっそりと建っていた。

それは石造りの堅固な建物であった。周囲を煉瓦製の高い壁に囲まれており、入り口は分厚い門で堅く閉ざされている。まるで小さな城塞のようなこの建物は、女神イエラを信仰するイエラ教団が保有する宗教施設のひとつだ。

イエラ教団は、パルディア王国でも屈指の規模を誇る宗教団体である。信者の総数はおよそ三〇万人。一般市民だけでなく、有力な貴族や王族にも熱心な信者がおり、その影響力は国家運営の中枢にも及ぶとされていた。

教団の創設者は自らを預言者と自称するベルベンガという人物で、彼は女神イエラの信託を受け、いずれこの地に、ゼベガ一族の血を引くゾルアークという者が現れ、パルディアの地を統べることになると予言した。その予言が嘘か真かは定かではなかったが、彼は時の国王に対し、それを阻止するためにはゼベガ一族を徹底的に排除すべきだと主張して関心を買うことに成功し、それ以来、イエラ教団は国内で勢力を拡大していった。

勢力の拡大にあたって、イエラ教団はパルディア各地に幾つもの関連施設を持つようになる。祭事や祝典、儀式などを執りおこなって信者に団結を強めるための寺院、貧しい者に教育の機会を与える学

院、怪我や病気になった者に対して無料で治療をおこなう病院、戦争や災害で親を失った子どもたちの面倒をみる孤児院、生まれつき障害を負った者や行く場所のない高齢者を養う養老院などで、その数は五〇を超す。この僧院も、そのうちのひとつだった。

この僧院は、主に若い修道女たちを対象として、基礎的知識や宗教的な教育を施すことを目的として建てられた研修施設である。男子は禁制で、滞在者は教団の関係者を含めて全員が女性だ。しかもその大半が、一四歳から一八歳の若い娘たちだった。

この僧院が、禍々しい肉の悪魔たちによって包囲されたのは、王暦一二八三年九月二五日のことである。悪魔たちの目的は、建物の中にいる修道女たちを捕食することではなかった。彼らの目的は、自分たちが新たな生命体に進化するため、彼女たちの身体を肉の「器」にすることだったのである。

僧院が一万匹を超える肉の悪魔たちに取り囲まれた時、施設には一二〇人の若い修道女たちが滞在していた。彼女たちは朝起きて、ふと窓から外を見た時、施設の周りに数えきれないほどたくさん肉の悪魔たちがいることに気づいて、悲鳴をあげて恐慌状態に陥った。「ひ、ひいいいいいいいッッ、な、なにッ、なんなのッ、あの化け物たちはッッッ！」

「な、なんて、なんておぞましい姿なの……ッッ！」

「お、おおッ、め、女神よッ、こ、こんなッ、こんなことってッッッ！」

「ひいいいいいいいいいッッッ！ こ、怖いよおッッ、怖いこわいッ、こわいいいいいいいいいッッッ！」

「ね、ねえ、あ、あれって、も、もしかして……う、噂に聞く、肉の悪魔なんじゃ……」

王国を蹂躪する肉の悪魔についての話は、半ば孤立した施設に滞在する修道女たちの耳にも届いていた。しかし、耳にした話の内容は、どれもこれも信憑性に欠けるような与太話の類であったため、少女たちはまったく信じていなかった。とても現実の話とは思えなかったからだ。

だが、状況がこうなってしまうはや、全てが後の祭りである。もはや逃げることは叶わない。そして、成す術もない。

「オ、オオオ……」

「オオオ、オオオ……」

「オオオオオオ……」

低く鈍い恐ろしい咆哮をあげながら、肉の悪魔たちが攻勢を開始した。一万匹を越す悪魔たちが、ほとんど同時に、一斉に前進を開始して、僧院に群がったのだ。

僧院に、武装した僧兵の警備はない。

中にいる修道女たちが大混乱に陥った。

「い、いやあああああああああああッッッ！」

「く、来るッ、あ、あいつらッ、こっちに来たわッッ！」

「窓閉めてッッ！ 全部閉めるのよ！ 早く！」

「扉も閉めるのよ！ 絶対にッ、一匹も中に入れちゃダメよッッ！」

「ひッ、ひいいいいいいいいッッ、あ、あいつらッッ、壁を上ってるッ！ 昇ってきてるううううッッッ！」

「いやあああああああッッ！ 助けてッッ、たすけてッッ、お父さあんッッ、お母さああんッッ！ 助けてッッ、助けてええええええええええッッッ！」

「泣かないの！ 大丈夫ッッ、絶対に、大丈夫だから！」

あああああッッッ！」

僧院の中に、若い修道女たちの悲痛な声が響き渡る。恐慌状態に陥った彼女たちのなかで、もつとも賢い選択を取った者は、とっさの勢いで、自らの命を断った者だった。

ある少女はその場の勢いで塔から身を投げて自殺し、またある少女は食事用のナイフで首の動脈を切って自殺を遂げた。逃げ惑う混乱の最中、転倒して仲間たちに踏み潰されて圧死した少女もいたが、彼女も幸運な部類に属する者であろう。なぜならば、苦しまずに死ねたのだから。

最後の最後まで、もがいて、足掻いて、隠れて、潜んで、必死になって生きようとした少女たちが辿った運命は、悲惨のひと言に尽きる。狭い僧院に、逃げ場はなく、彼女たちは結局、禍々しい肉の悪魔たちに捕まってしまったからだ。それも、生きたまま。

その、捕まった少女たちが、それからどのような運命を辿るかについては、ほとんど等しく平等と言ってよいだろう。ゆえに、ひとりの少女の命運を抽出し、垣間見れば、他の少女たちが辿った運命を知ること叶うというものである。

若い修道女の中に、ヴァネッサ・マルセッティという娘がいた。年齢は一七歳。大商家として知られるマルセッティ家の出である彼女は、僧院で生活する修道女の中でもつとも美しいと評判の少女であった。

彼女が教団に入った理由は、女神に対する信仰心が厚かったわけでも、慈善活動に興味があったからでもない。ただ単純に、家の都合によってであった。

マルセッティ家にとって、教団は重要な取引相手であった。教団と

の繋がりは、特に金融の面で強く、マルセッティ家は教団と合同で高利貸しや銀行業を営んでいた。そのため、強い信頼関係を維持し続けなければならず、その一環として、当主の娘であるヴァネッサを教団に入団させたのであった。

父親としては別に娘の一生を宗教に捧げるつもりはなかったから、いずれ機をみて実家に戻すつもりであった。それまでは教団で、花嫁修業のつもりで学問や一般的な教養を学んでくれればいい、という程度の気持ちだった。

むろん、ヴァネッサは不満だった。しかし、父親の意向に逆らえるはずがなかったので、彼女は仕方なく教団に入団し、見習い修道女のひとりとしてこの施設にやってきたのだった。

僧院での生活は退屈だった。そして窮屈だった。毎日、決まった時間に起床し、決められた雑務をこなしながら、味の薄い食事をとり、つまらない勉学に身を投じながら、同じ時間に就寝するだけの毎日。それがずっとずっと繰り返されるのだ。ヴァネッサの不平や不満は溜まっていく一方だった。

だから彼女は、溜まった鬱憤を晴らすため、自分よりも立場や力が弱い者に対する「いじめ」に精をだした。金をばら撒いて、仲間を作った。

ヴァネッサのいじめの標的となった者は、親がいない孤児院出身の者や、貧しい家の出の者たちだった。そしてそのいじめの内容は、大半が性的なモノだった。これは、ヴァネッサ自身の性的欲求を満たすためでもあった。

ヴァネッサのいじめは過激を極めた。標的の少女の衣服を無理やり剥いで裸にし、冷水を浴びせたり、鞭で打ったり、あるいは乳房に

け拡げられたのだ。

ブデブチブチブデブデデデデデデデデデデ
イイツツツツ！

筋が引き千切れる音がした。子宮口が引き裂かれるように無理やりこじ開けられて、ヴァネッサの口から絶叫が木霊し響いた。

……続きは本編でお愉しみてください。